

## 施設栽培キュウリにおける常温煙霧処理と手散布の付着量の比較

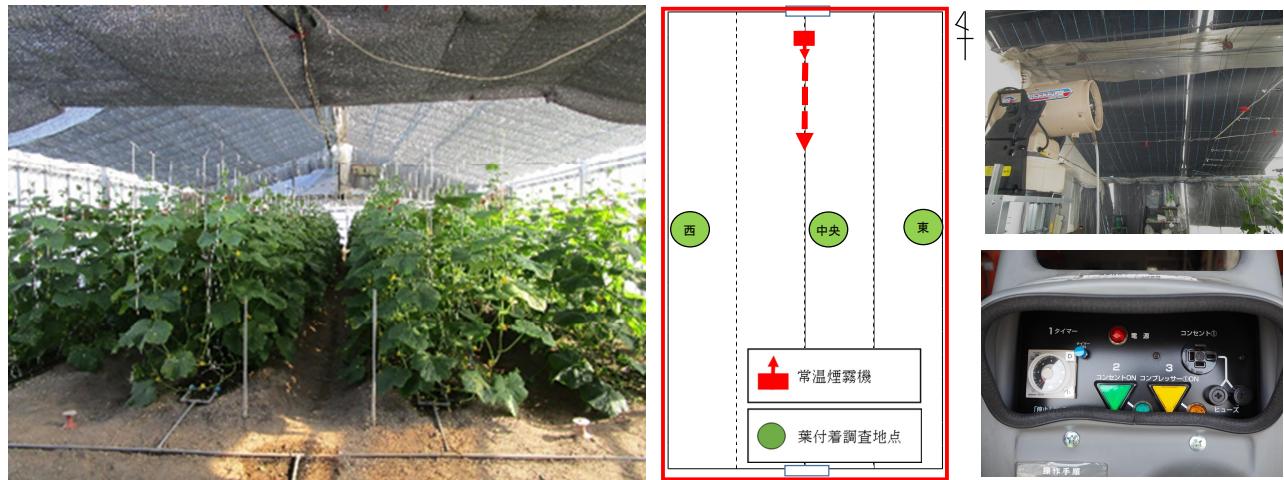


図1 試験ほ場と常温煙霧機(左:キュウリの栽培状況、中:調査地点略図、右:常温煙霧機と操作盤)

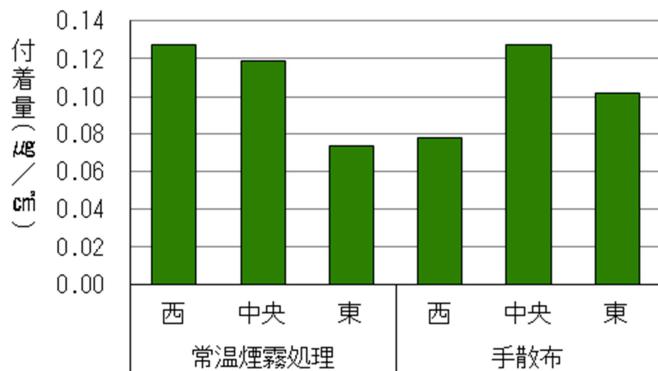


図2 キュウリ葉への農薬の付着量

常温煙霧法は、専用の機械を用いて、少量かつ高濃度の薬液を霧状にして施設内に拡散させる散布方法です。機械のスイッチを押すだけで無人で防除が行えるため、省力的で作業者暴露がない防除方法として注目されていますが、ハウスの大きさや形状、作物の繁茂程度など、様々な条件下での拡散性や付着性については明らかとなっていません。そこで、キュウリ栽培ほ場(2a)において、グレーシア乳剤80倍希釈液を10L/10a常温煙霧処理した場合の葉や果実への付着量を調査しました(図1)。

葉への付着量は、一部の調査地点で少な

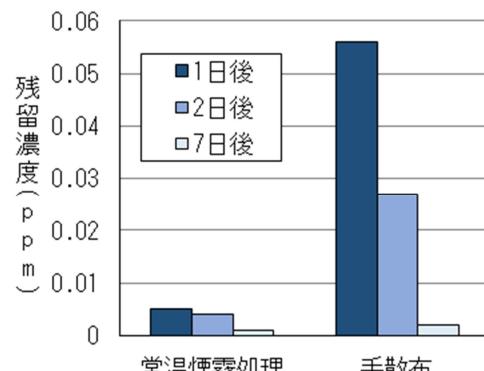


図3 キュウリ果実における残留濃度

かったものの、手散布で2,000倍希釈液300L/10aを処理した場合と概ね同程度となりました(図2)。一方、果実では常温煙霧処理の残留濃度は手散布より低くなる傾向が認められました(図3)。本試験では、ミナミキイロアザミウマに対する防除効果も確認しており、常温煙霧処理でも手散布と同等の高い防除効果が得られました(データ省略)。

なお、令和7年11月現在、キュウリに適用のあるグレーシア乳剤の使用方法は、散布のみであることにご注意ください。

(農薬管理担当 岡美佐子 088-863-4915)